

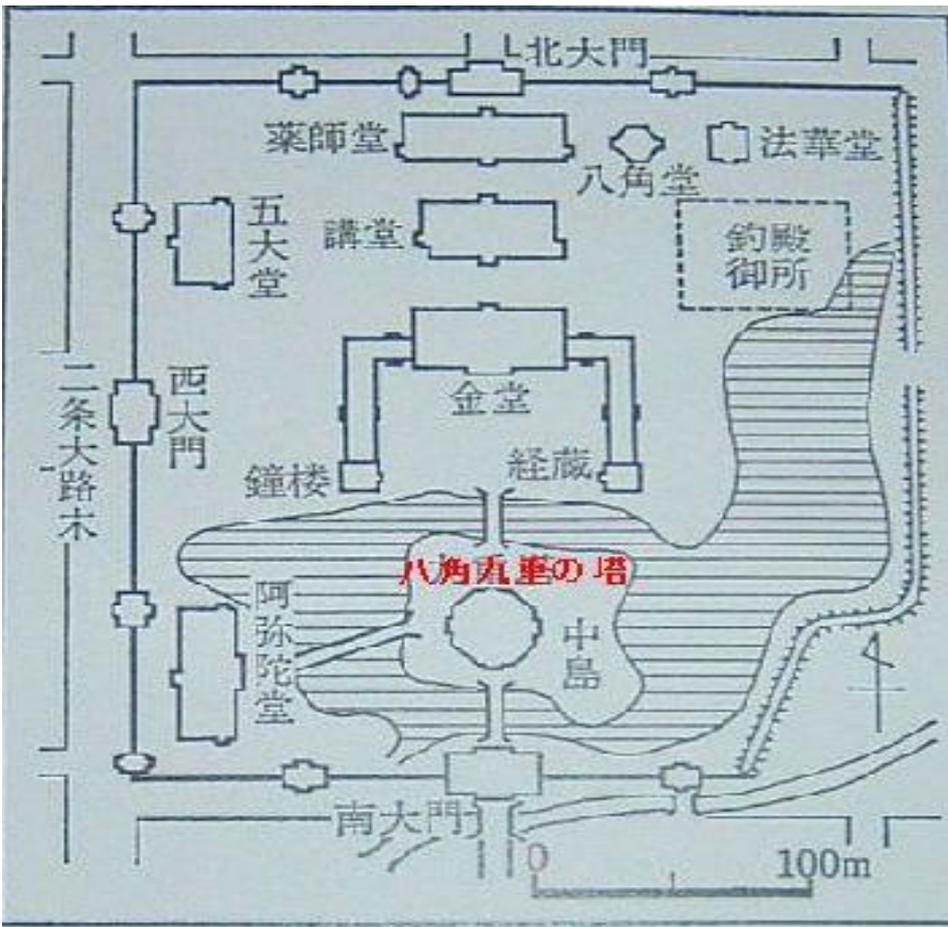
法勝寺（ほっしょうじ）跡：京都市動物園付近

法勝寺は1075年（承保2年）白河天皇の命で洛東白河にて造営が始められました。現在の京都市左京区岡崎の地です。この場所は古くより藤原氏の白川殿（白河院）がありましたが、藤原頼通の没後、子の師実（もろぎね）が白河天皇に献じたそうです。白河院の建物の一部を残しながら、大規模な寺院が建立され、1077年（承暦元年）に創建供養が行われたそうです。

1086年（応徳3年）白河天皇は子の堀川天皇に譲位して隠然たる力をふるったが、堀川天皇の死で孫の鳥羽天皇が即位した1107年（嘉承2年）ころから国政の前面に立ちあらわれて院政を確立しました。また、中下級貴族を院近臣として重用し、彼らの受領とした財力、武士としての軍事力を手中に収め、力を蓄えたのです。

法勝寺は二条大路を延長した道路の突きあたりにあり、南北二町、東西二町の寺域の北・西・南にそれぞれ大門があり、天皇や上皇は西大門を利用されていたようです。西大門を入ると、目の前が金堂で正面九間・奥行四間の大建築で、金堂の東西に回廊が取りつき、南に折れて鐘楼・経蔵に続き、金堂の前面には中島をもつ池があり、池の西側に阿弥陀堂が建っていました。寺院北側には講堂・五大堂・法華堂・僧房が建っていました。1083年（永保三年）には八角五重塔・薬師堂・愛染堂が完成しました。中島にそびえる八角五重塔は瓦葺（のち檜皮葺）で高さ約81m、内部に金剛界五仏が安置されました。この法勝寺の活用方法としては天皇主催の法会を開くいわば劇場のような利用で、天皇による全国支配と仏法護持を象徴するかのよう威容があったようです。

白河の地には平安京の延長というべき方格地割がしかれました。そして法勝寺に続き、十二世紀前半に尊勝寺・最勝寺・円勝寺・成勝寺・延勝寺がつぎつぎと建てられ、六勝寺と総称され、白河はさながら洛東の仏都と化していったのです。しかし室町時代になると、法勝寺を含む六勝寺一帯は衰退の一途を辿ります。その後、六勝寺跡は近郊農村化しますが、幕末に多くの藩邸が築かれ明治の近代化を迎えます。





(県史：京都府の歴史)